

立川志らく



分からぬ観客おいてけぼり

一般客向けの試写では、内容が理解できずおいてけぼりの人もいた。大衆迎合が目立つハリウッド映画で、好き嫌いでなく「分かる分からない」で語られる作品は珍しい。これは進化とも言える。

半面、おごりも感じた。俳優が複数の役を変装して演じているのが見どころで、最後に種明かしがある。でも知らない俳優が多いので、驚きようがない。世界の普通の観客はジム・スタージェスつて言われても分かりませんって。

アル・パチーノが主演だったら違ってたでしょうが、トム・ハンクスは演技で見せる役者じゃないから、演じ分けでうならせはくれなかった。印象に残ったのはペ・ドゥナ。クローン人間の無表情が逆に観客の想像力を刺激した。

そうしてみると、これは、DVDでも何度も確認しながら見る映画です。それが現代的な見方なんでしょう。
(落語家)

壮大華麗な物語に余白なく



川口敦子

単一の物語では見えない何か、交錯する複数の物語からは見えてくる。そう語ったのは、マルチプロット映画の達人ロバート・アルトマン。六つの物語が入り乱れる本作の場合、一つの筋で十分に見えるテーマが、絡まり合う複

数の筋のせいではばやけてしまう。アルトマンは、重層的に進む物語の隙間を観客に埋めて欲しいと、語り過ぎずに語る術を心得ていた。かたやこの共同監督たちは壮大華麗に物語を積みかけるだけだ。余白がない。観客は時代を

え人を愛え反復される一つの主張をうんざり受け取るしかない。ほろ星のあざ、航海日誌、作曲家の手紙など、筋と筋を橋渡しするヒントが差し出されても、吟味する前に次の挿話がなだれ込む。行間を埋め全編を貫く大きな視点を探るマルチプロットのスリルを味わえぬまま、もどかしさばかりが募る。(映画評論家 寄稿)

国家や文明・科学とは問う



島 蘭進

「共産党宣言」の刊行、米国のゴールドラッシュが1848年。59年にはダーウインの「種の起源」が出る。この時代に端を発する六つの物語には、原子力や生命科学、文明の解体など現代世界が抱える大きな問題が見渡される。

映画に登場する様々な悪は、権力や秩序といった集団利益と結びつく。現実にもグローバル化が急速に進む中、国家や宗教などへの帰属意識を尊ぶ動きがある。こうした意識こそが人間同士を傷つけてきた。進化論的な弱肉強食

の社会では、支配構造と密接に関連した形でしか社会の絆が生まれない。この映画はそんな現状へのアンチテーゼであり、人類共通の基盤をどう見いだすかを模索している。
抵抗感があったのは、未来のソウルの全体主義的な描き方。増殖する東アジアへの西洋の恐怖感が反映したのだろう。(宗教学者)



映画「クラウド アトラス」

ウォシャウスキー姉弟とトム・ティクバが共同監督した映画「クラウド アトラス」が公開された。1849年の奴隷貿易から地球崩壊後の2346年まで、時空を超えた六つの物語を絡み合わせ、輪廻転生的に人類の歴史を見通す。トム・ハンクスやハル・ベリーらが主演し、巨額の予算を掛けた映画の実験は果たして成功したのか。作家、宗教学者、落語家、評論家が読み解く。
(構成・石飛徳樹)



文章や音楽、進歩の突破口

島田雅彦



六つの時空間を激しく移動するが、いずれの物語も映画の既視感がある。奴隷と白人の友情は「ボカホンタス」、クローンの反乱は「ソイレント・グリーン」、地球崩壊後のサバイバルは「アポカリプト」を想起させる。潤沢な資金を使って人類史を見渡そうとの試みは「イントレランス」のD・W・グリフィスへのオマージュか。
人間の個体は悟りに至った頃に死んでしまう。類としての人間は個々の知性を蓄積し継承することで破滅を免れている。社会の進歩は知性の相対的向上の結果というよりも、突出した知性と勇気を持った先駆者が突破口を開くお陰で達成される。この映画では手記や音楽、映画、投稿動画などが進歩の鍵として描かれる。
東洋的な輪廻転生を世界に通じる普遍的な物語にするためには、西洋的な「ラブ&ピース」を持ち出すしかないようだ。(作家)

※作品や社会現象などを様々な角度から読み解く欄です。随時掲載します。